

Q6 明治時代の品濃村の住民生活はどのようなものだったのでしょうか？

A

- ・明治時代になると、庶民の姿がよく分かる資料が出てきます。『神奈川県皇国地誌相模国鎌倉郡村誌』がそうです。この本は、そもそもは明治政府が『皇国地誌』として町村誌と郡誌の2種類を編纂し、そのうち町村誌を明治8年の調査結果に基づき発刊する予定でした。ところが、原稿の段階で関東大震災に遭遇し、そのため全てが焼失してしまったと思われたところ、相模国鎌倉郡89か村の原稿は残っていることが分かり、そこで、平成3(1991)年に神奈川県図書館協会が復刻刊行したのがこの本なのです。鎌倉郡に関心を持つ者にとっては、大変有り難い本です。
- ・以下、項目に分けて引用してみましょう。
- ・「地勢」として、東北に山を負い、西南に岡陵起伏し、東より南まで東海道を帯びとあり、「袋小路」になっていることが分かります。田圃は山間に連続し、土地高低なれども運輸は便にして薪炭乏しからずとあります。
- ・「地味」まで書かれているのが面白いです。質は中等で稲・粟・豆・麦には適すが桑や茶や蔬菜には宜しからずとあり、水利は不便で時々旱(ひでり)に苦しむとあります。因みに、平戸村の地味は瘦せて悪く、稲・粟・豆・麦・桑・茶に宜しくなく、蔬菜とサツマイモに適すとあり、水利は便で灌漑に苦しむことはないとあります。隣接しているながら、品濃村と平戸村にはかなりの違いがあることが分かります。
- ・「水利」として、「品濃川」があり、水勢は緩く清らかで舟筏は通らないとし、また、5町余の田の灌漑に供する「若崎堀」がある他、田の灌漑に供する「池」が3つあると述べています。「品濃川」は「後山田村より来り」とありますので、現在の「川上川」のことです。
- ・「税地」として、総計約146町(田22町、畑27町、宅地2町、山林92町、萱野約1町)とあり、田が少なく(15%)、山林が多い(63%)ことが分かります。
- ・「戸数」として、平民が67戸(うち、本籍65戸、寄留2戸)、社寺が各1戸。『新編相模國風土記稿』の時代は58戸であったから増加していることが分かります。
- ・「人員」として、本籍425人(男209人、女216人)、寄留10人(男5人、女5人)。
- ・「馬」も統計の対象となっているのは時代を表わしています。牡(おすうま)5頭とあり、また、「車」も統計の対象となっており、人力車2両、荷車2両とあります。
- ・「山」は「七ツ木山」といい、高さは40丈(120m)。「林」は3か所。
- ・「橋」は品濃川に架かる3か所があり、名前は「熊の橋」、「馬喰橋」、「霞橋」。このうち今も残っている橋は「霞橋」のみです。
- ・「東海道」について、「道敷4間、馬踏3間」とあるのが面白いところです。老松の並木が両側に並列し、焼餅坂、品濃坂等があるとしていますが、谷宿坂は書かれていません。
- ・「電線」の距離までが態々18町20間(約2km)と書かれているのが実に面白いです。

- ・「社」として白旗社が書かれていますが、祭神は義経であって、頼朝ではありません。また、社地に老松一株、榎一株があり、樹齢 300 年余とありますが、今はないのではないかと思います。
- ・「寺」として、北天院が本郡山之内村円覚寺の末派なりとあります。
- ・「掲示場」は字「宮の前」に。白旗神社前の往来の多いところにありました。
- ・「民業」として、男と女に分けて書かれており、男は農業 52 戸、農業と薪炭業の兼業 5 戸、工をなす者 4 戸、雑業 5 戸とあり、女は自家用に木綿を紡績し布を織る者 66 人とあります。男を合計すると 66 戸となり、農業（薪炭業との兼業を含む）の占める割合は 86%と圧倒的に多いことが分かります。しかし、江戸時代の「品濃村商人書上」にあったようなお客相手の職業は全く書かれていません。「雑業」の中に含まれているのかどうかは分かりません。